

2 1 世紀の日本のかたち（26）

山岳都市東京

—東京の姿形について考える（その7）

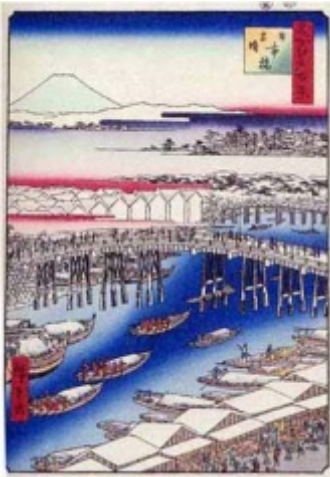


戸沼幸市

<(財)日本開発構想研究所 理事長>

1. 富士山は東京のランドマーク

東京の前身、江戸のまちからは春夏秋冬、富士山が実によく見えていたようです。



安藤広重の名所江戸百景（安政3～5年（1856～58年）には十九景もの富士山の入った絵があります。

と水辺、橋、町人、武士達の生活風景が季節感溢れるように描かれております。そして、遠景は江戸のスカイラインに、しばしば山々、特に富士山が描かれております。すり鉢を伏せた富士山の形は単純明快で見間違いようがありません。まさに江戸のランドマークです。

白い肌、冠雪と季節ごとに描き分けられた富士山は江戸の西南の方角にいつも見えていたに違いありません。

葛飾北斎の「富嶽三十六景」にも江戸からみた富士山の絵が十七景も入っております。こちらは富士山そのものに絵の焦点がある分だけ中景抜きで前景とこれに接近する富士という構図です。

図1 広重の名所江戸百景「日本橋雪晴」

広重が切り取る江戸の風景は、前景、中景、遠景と実に大胆な構図です。まず、前景は視点場、画人の目線の位置と雰囲気はこの江戸絵を見る人を引き込んでしまいます。中景にはまち並み、水

広重などの描く江戸の遠景には富士山に次いで筑波山も登場しています。江戸の北東のスカイラインとして、一連の山並み景観の中の筑波山は江戸の人々に身近な山であったに違いありません。

江戸から明治に入った東京でも、東京人にとっ

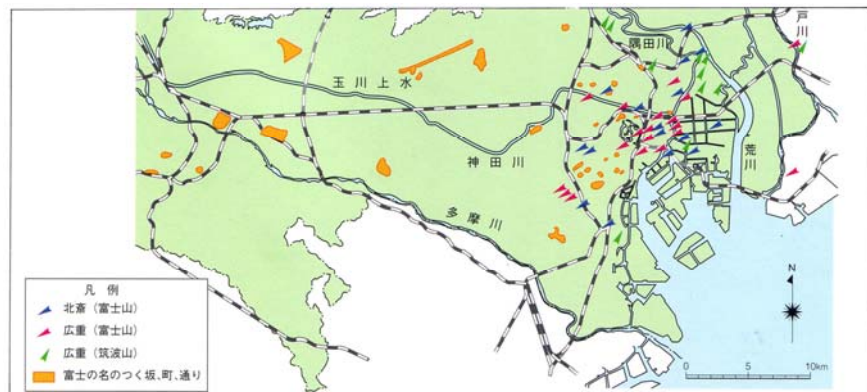


図2 富士山、筑波山を描いた地点、富士の名のつく場所（「東京都都市景観マスタープラン」）

て富士山は身近な山であったことを示すものとして、今も地名として残っている富士見町、富士見台、富士見通り、富士見坂があります。しかし、

かつて富士山がよく見えていたこれらの地域に家が建て混み、高層、超高層建築が林立して遠景への眺望を遮り、山が見えなくなってしまいました。江戸期からある「富士見坂」と名付けられたいくつかの坂のうち、JR山手線の内側で現在も富士が見えるのは、日暮里の「富士見坂」のみで、これとても半分欠けた富士山になってしまいました。これについても、この眺望点を守る運動をする人々によって辛うじて保たれているという具合です。



写真 日暮里富士見坂より見るダイヤモンド富士

2010. 1. 30 千葉一輝氏（富士見坂眺望研究会代表）撮影

たしかに現代都市東京においても、高層、超高層建築の展望台からは周囲の山々とともに富士山を見ることはできるのですが、江戸、明治の人々の富士を見た地上の視点場を大切にすることは歴史的眺望景観の保全として意味のあることだと考えます。

現在、富士山については静岡、山梨の両県が世界文化遺産への登録に向けて国に働きかけておりますが、東京都も江戸・東京の文化の守護神ともいえる富士山の世界文化遺産の登録運動に一役買っても良いのではと思うのです。

その際、改めて富士山の見える地上、地表を平

成富士見坂、富士見公園などとする案はどんなものでしょうか。

2. 東京の山々

・東京から見える山

今では東京都区内の地べたからは東京の山々はよほど見えにくくなってしまいましたが、逆に天気さえ良ければ、高層、超高層一帯が関ビル、東京タワー、東京都庁、六本木ヒルズなどから巨大都市東京を取り巻く山々がよく見えます。

西南方向には丹沢山地、そして富士山(3,776m)、日によっては3,000m級の南アルプスの山々までを見ることができます。西の方向には東京都多摩地区の山々、これに隣接している山梨県の山々、秩父の山々-関東山地が眺望できます。

北に向かつては日光の山、そして筑波山(877m)が見えます。稜線に特徴のある筑波山は関東平野の北の端を示すベンチマークです。

東方は海につながる大平野ですが、これに続く房総半島の緩やかな起伏が識別されます。

関東平野一杯に広がる巨大都市東京はまさに山々に囲まれた山岳都市といってもよいでしょう。

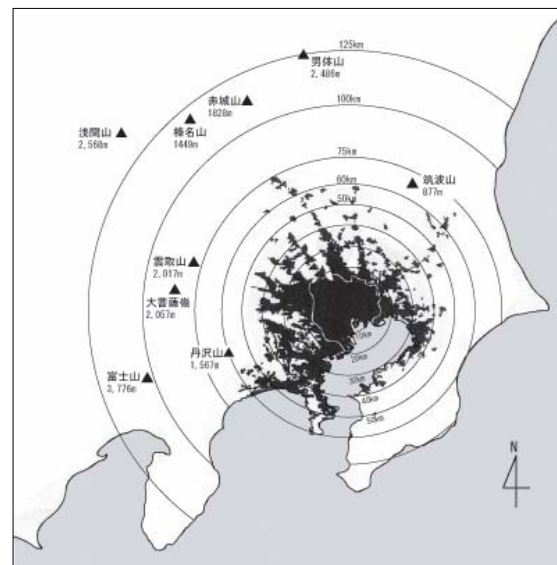


図3 山岳都市東京

・東京都の山岳軸

東京都の行政区域は東京湾、海側から西へ横軸状に関東山地に突き刺さるように入り込んでおります。

東京湾と一体になってできた都心部は多くの埋立地を含み、標高100mに満たない平坦な地理地形です。東京23区内の最高地点は練馬区の武蔵関公園南方の地点（約58m）、旧東京市内の最高地点は新宿区の箱根山（44.6m）なのです。これに対して西半分の多摩地区は500m、1,000mを超え、2,000mに近づく山地を含んでおります。

東京都の自然景観を山側から解説すれば、山岳地帯、これに続く丘陵群（狭山丘陵、霞丘陵、草花丘陵、加住丘陵、多摩丘陵）、そして武蔵野台地を経て、ほぼ平坦な都区部につながっているのです。

静岡、山梨、埼玉の各県に隣接する東京都多摩地区を縁取る山岳軸は、高尾山（600m）、小仏峠（548m）、生藤山（991m）、三頭山（1,528m）、雲取山（2,018m）、三峰山（1,921m）、西谷山（1,718m）、天目山（1,576m）、大菩薩嶺（山梨側2,057m）などがリングになって連なっています。日本の行政区画は河川で区切るか山稜で分けするかが多いのですが、この場合は山稜、山岳軸で決められたわけです。東京都が想定している山岳軸は、ほぼ全域が緑豊かな秩父多摩甲斐国立公園に含まれ、稜線の美しい軸です。

山好きな都市住民にとって、身近に山があるとは有り難いことです。東京都民の場合、高尾山や御岳山、山岳軸の山々は手頃で、子供連れ、家族連れでも山登りを楽しめます。

自力で山頂に立って下界を見下ろす時の爽快な気分は格別です。超高層からの目だけ喜ぶのとは違って、全身が歓びます。

山登りの道中に心身に触れる木々や草花、小動物を通して、改めて自然、人間を含む自然を私たちに思い出させてくれます。

・丘陵地景観基本軸

東京都景観計画では多摩山岳地帯と武蔵野台地の中間ゾーンをなす標高100～300mの緑豊かな丘陵地帯を東京の骨格的な景観形成のための基本軸に設定しております。この基本軸の設定（丘陵地と丘陵地山裾からおおむね500mまでの範囲）によって、この地帯への乱雑な宅地化、都市化の波に歯止めをかけ、丘陵の保全、この地帯の河川、里山の保全、集落、神社、寺などの歴史的文化的景観の保全を図ろうとするものです。

これらの丘陵地帯は、東京の人口急増期、相当に宅地化され、多摩ニュータウンなど大規模な住宅団地が造成されました。東京都が想定する多摩地区の景観づくりの基底にこの丘陵地景観基本軸を設定し、地域のまちづくりに役立たせようというわけです。

その際、東京の人口急増期に造られた大規模団地住民の急速な高齢化、住民の都心回帰といったこの地域コミュニティの変化変容があり、これにいかに対応するかが問われています。

人口急増、高度経済成長期の人工景観と自然景観のせめぎ合いの後で、自然の中の豊かな人文景観の取り戻しと、落ち着いた「住まいのかたち」が改めて求められているともいえます。

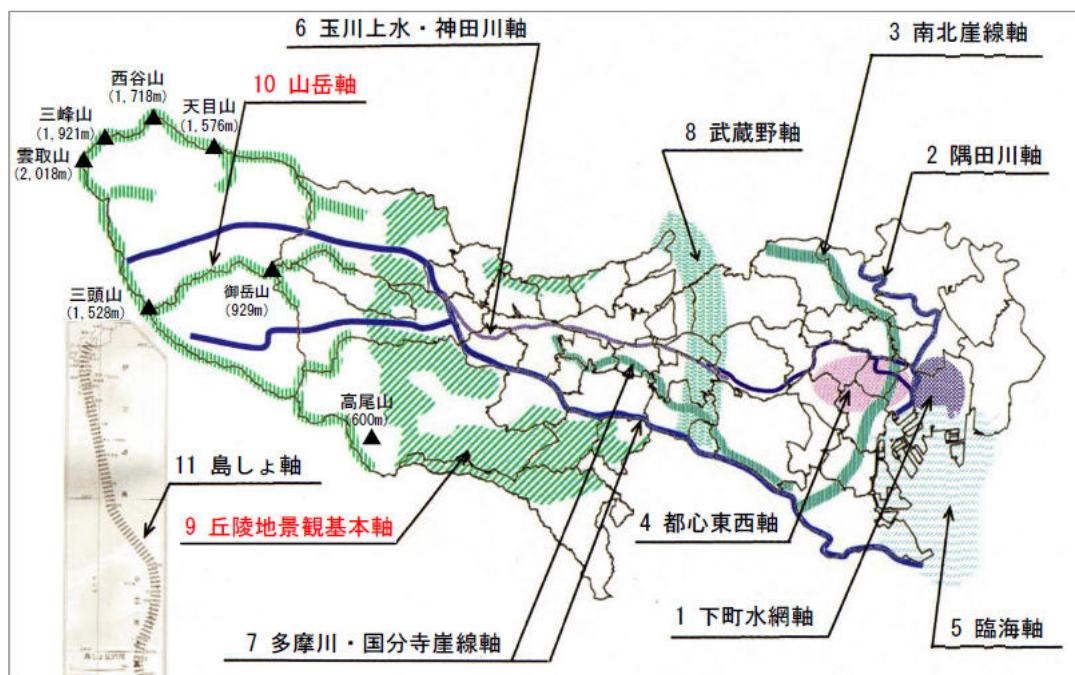


図4 山岳軸と丘陵地景観基本軸（「東京景観計画」に加筆）

（赤字及び山岳の部分を加筆した。）

参考文献

- 『東京から見える山 見えた山』横山厚夫 丸の内出版 1971
- 「東京都都市景観マスタープラン」東京都都市計画局 1994
- 「東京景観計画」東京都都市整備局 2008

(2010.02.15)